

日本語入門講座におけるコース運営上の留意点

—学習者の苦手意識をめぐって—

印道 緑・田吹ともみ・應地弥生

(国際教育交流センター) (非常勤講師) (非常勤講師)

キーワード

地域在住日本語学習者、ニーズ分析、苦手意識、読み書き、漢字・語彙、自律学習

要旨

北九州市立大学国際教育交流センターでは、地域在住の日本語学習者のための日本語講座を開講しており、現在「会話Ⅰ」「会話・読み書きⅡ」「会話・読み書きⅢ」の3コースを提供している。この論文では、受講生のニーズ分析をもとに地域在住者の日本語学習に対する意識、特に学習上のどのような点に苦手意識を抱いているかに焦点をあて、それを克服するためのコース運営上の留意点を探った。その結果、①学習者は読み書き、特に漢字学習に苦手意識を持つ傾向があり、そのため語彙力が不足しがちになること、②この問題を克服するためには、初級文型中心のコースであっても、基礎的な漢字の体系的学習を組み入れたカリキュラムにし、コース終了後も学習者が自律的に漢字を含む語彙を増やすことができる能力を養成する必要があることの2点が明らかになった。

1. はじめに

日本語入門講座は北九州市とその周辺地域に在住する外国人および定住者のための日本語学習ニーズに応えるため、また、大学教育の開放という観点から平成4年度に開講され、今年で16年目となる。¹ 会話Ⅰコースおよび会話・読み書きⅡコースに加え、平成17年度秋学期からは、過去の受講生からの要望の高かった会話・読み書きⅢコースが新設された。各コースの授業は90分1コマで週3回、計14週で終了する。受講者の国籍は47カ国にわたっており、受講者数は平成18年度までに延べにして814名にのぼっている。これらの長年の実績をふまえて指摘できることは、まず第一に、このような地域在住者の日本語学習ニーズの特徴として、生活に密着したニーズ領域と、習ったことがすぐに使えるという実用性への志向がみられるという点である。この論文の1つ目の目的は、まず、ニーズ調査により学習者のニーズと学習目的を明らかにした上で、教授上の留意点を指摘し、これまで蓄積してきた本コースのカリキュラムをより

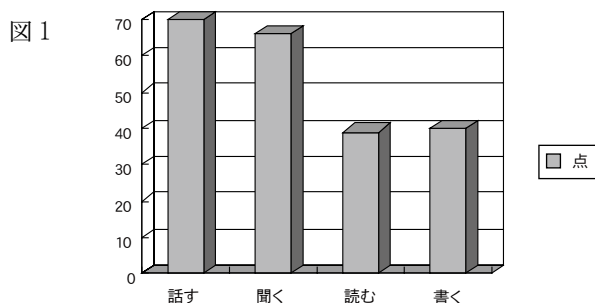
学習者のニーズにあったものに拡充するための一助とすることである。

もう1つ指摘できることは、日本語の学習について学習者が持っている苦手意識である。入門コースにおいて、4技能に関する学習者の意識調査を行うと必ずでてくるコメントに、「日本語を『話す』頻度は高いが、『書く』必要はあまり感じない」や「日本語にはたくさん漢字があって、『読む』『書く』のは難しい。毎日の生活の中でとりあえず必要なのは『話す』ことと『聞く』ことだ」というものがある。確かに、ひらがな、カタカナ、漢字、アルファベットと様々な文字があり、さらに漢字には複数の読みが存在する点が「読み書き」を複雑に見せている要因であることは容易に推測できる。しかし、学習者によっては、難しいからこそ、今「読み書き」の学習をする必要があると強く認識している人もいる。いずれにせよ、「日本語の読み書きは話すことより難しい」という意識を持っている学習者が多いということは推測できよう。この点についても受講者への意識調査で明らかにしつつ、これらの苦手意識が日本語学習にどのような影響を与えているのか、また、どうすればその苦手意識を克服することができるのかを提示するのが、本稿の2つ目の目的である。

2. 日本語学習に関するニーズ調査

以下に2007年度2学期開講の3コース、「会話Ⅰ」「会話・読み書きⅡ」「会話・読み書きⅢ」の受講者21名（内3名はⅡ、Ⅲコースを同時受講）を対象に行ったニーズ調査の結果を記す。² 内訳は「会話Ⅰ」8名、「会話・読み書きⅡ」7名、「会話・読み書きⅢ」9名となっている。

2-1. 4技能の重要度



各点数は4技能の重要度に応じて「最も重要」が4点、「2番目に重要」が3点、「3番目」が2点、「4番目」が1点というように、つけた点を集計したものである。これによると、学習者は「話す、聞く」能力をつけることを特に重要だと感じていることがわかる。2003年度と

2004年度に「会話・読み書きコース」の受講者を対象に行った同様のアンケート調査からも、これらの重要度についてはほぼ同じ結果が出ている。その際に並行して行った聞き取り調査では、「話す、聞く」ことと「読む、書く」ことについて以下のようなコメントが見られた。

- ・日本語を話すことが最も多い。
- ・話すことは身近なので、自然に習得できるが、読み書きは難しい。
- ・人と会話をすることやテレビで情報を得ることが大切だ。
- ・毎日の生活の中で最も必要なのは話すことと聞くことだ。日本語はたくさん漢字があって、書くのは難しい。

また、受容能力としての「聞く」力の重要性についてのコメントもみられる。

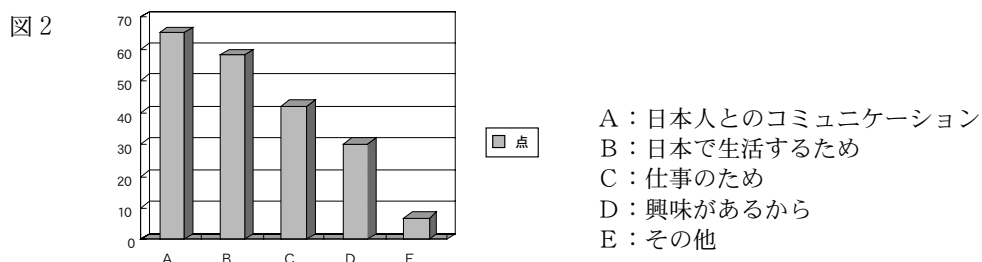
- ・子供が病気になった時に、病院で医者から受ける説明がわからなくて、非常に困ったことがある。
- ・聞く力を高めることで、より日本語がわかるようになる。話す力をつけるのはそのあとでもよい。
- ・日本人とのコミュニケーションは「聞く」ことから始まり、次に「話す」が必要になる。つまり、相手のいうことを「理解」してから自分のいいたいことを伝達するという順番になる。

一方で、情報発信の能力として「話す」力と「書く」力の重要性についての指摘もある。

- ・話すことと書くことに重点を置いている。
- ・時間ができたので、今まで難しいと思っていた「書く」練習を始めたい。

以上のコメントから指摘できる傾向として、学習者は「話す」力については、4技能のなかでは使用頻度が最も高いため、自然に習得することができそうだととらえていることが分かる。また、「聞く」力をつけることが「話す」能力をより高めるということも理解している。しかし、「書く」ことは学習が難しく習得にも時間がかかるように思われるため、まずは「話す、聞く」力をつけることを最優先の課題にしているという姿勢がみられる。

2-2. 学習目的の重要度



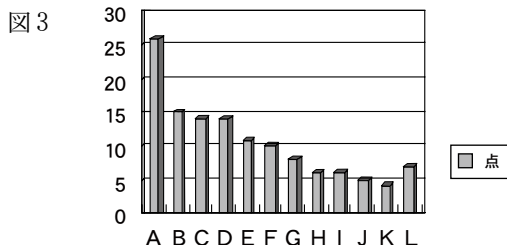
学習目的についても4技能の重要度と同様の方法で集計した結果をまとめると、図2のようになる。この結果から、家族を含めた日本人とのつきあいや日常生活をする上で日本語学習が必要だという答えが多数を占めていることがわかる。2003年度と2004年度に「会話・読み書きコース」の受講者を対象に行った同様のアンケートからも、これらの重要度についてはほぼ同じ結果が出ている。その際に並行して行った聞き取り調査では、主婦の場合、家族特に子供と子供をめぐる保育園や学校の教師とコミュニケーションをとる必要性を強く感じているというコメントが多く見られた。

- ・日本人の配偶者とその家族と一緒に住んでいるため、日本語でのコミュニケーションが必須である。
- ・家族以外の日本人では、子供の保育園の先生と話す必要がある。
- ・子供の学校の連絡書類などが読めないので、日本人の夫に読んでもらっている。
- ・月に1回、地域の公民館で主婦たちに自国の料理を教えているため、そのレシピをパソコンで作成したり、作り方を日本語で説明したりする必要がある。

仕事探しに必要なとの回答が低いのは、コースがゼロ初級から初級終了レベルであるため、英語学校の教師を除けば、まだ、仕事ができるという環境や条件が整っていない段階にある学習者が多いためではないかと推測される。

2-3. 読み書き能力が必要な場面

ここからは、「読み書き」能力に関するニーズ調査³の結果に移る。学習者にどんな場面で読み書きの必要を感じるかを、必要度の高い順に順位付けをしてもらった。その結果を一位3点、二位2点、三位1点で集計したものが下の表である。



A：公的機関、区役所等 B：家庭、子育て C：郵便局 D：授業 E：買い物
 F：銀行 G：駅、バス停等 H：パソコン I：仕事探し、ハローワーク J：病院
 K：日本人との交流、手紙等 L：その他（ATM、自販機、食堂、運転免許、図書館）

このグラフによると、圧倒的に多かったのはA「公的機関」で、その内容は「ビザ・外国人登録関係書類、健康保険・年金関係書類」等の読み書きである。次にB「家庭・子育て」で、「子供の学校からの通知・連絡簿、PTA関係、子供の宿題の手伝い、家計簿の書き方、スーパーの製品表示や電気製品の使い方の説明書を読む」等であった。C、E、Fについては日常的に書類を処理する必要がある場面であり、「各種申込書、郵便等のラベル、歳暮・中元等ギフト送付伝票」等の書き方があげられた。D「授業」は当講座の日本語学習を指す。G「駅、バス停」は「各種交通機関の時刻表・運賃表・案内板、車を運転する際の標識、その他街中での看板」等の読み方があげられた。仕事探しの項目のニーズが低いのは先ほど述べた理由「学習者の日本語のレベル」によると思われる。

ここで、注目すべきことは読み書き学習においてB「家庭・子育て」のニーズが高いことである。これは、「学習目的」の項目で「家族を含めた日本人とのつきあいや日常生活をする上で日本語学習が必要だと答えている学習者が多いこと。中でも主婦の場合、家族特に子供と子供をめぐる保育園や学校の教師とのコミュニケーションをとる必要性を感じていること」と呼応している。さらに、4技能の重要度の調査結果と併せて考えると、初級学習者にとっては「話す・聞く」が優先的な課題であるが、同時に地域在住の生活者としての立場から「読む・書く」必要性も認識していることがわかる。このように、読み書きの必要性を認識していながら優先順位が低い理由についてコメントから読み取れるのは次のようなことである。『読み書き』学習の必要性は感じているが、学習が難しく習得にも時間がかかるように思われる。そのため、まずは『話す、聞く』力をつけた後で、学習時間の余裕ができれば『読む、書く』学習に取りかかろう」と考えている学習者の姿勢が浮かび上がってきた。また、17年度の学習者からコース終了時に回収されたアンケート調査では、「日本語の勉強で何が一番難しいか」という質問に対し、71%が「漢字、カタカナ等の読み書き」を挙げていた。つまり、学習者の多くは「読み書き」の学習に関してある種の苦手意識を持っていることが指摘できよう。このこと

は、地域在住の日本語学習者向けのカリキュラムを開発する際のポイントとして大きな示唆を与えてくれるだろう。

3. 日本語入門講座における教授上の留意点

現在、日本語入門講座では春学期に「会話Ⅰ」と「会話・読み書きⅡ」の2クラス、秋学期に「会話Ⅰ」、「会話・読み書きⅡ」、「会話・読み書きⅢ」の3つのコースを開講している。これらの3つのコースを受講すれば、初級の日本語の文型を一通り学習できるようになっている。

Iのクラスは全く日本語を知らない人、来日直後の人のために、ひらがなや挨拶から始めるクラスである。当然、全くの初級者が多いが、日本に来て数年経ち、日常生活の中で日本語を覚え使用している人が入ってくることもある。これらの学習者の中には一見、発話などは自然で、聞き取りもでき、日常の日本語でのコミュニケーションはできているように見える者もいる。しかし、実際には子供の学校や役所、病院などの場で思うように意思を伝えられない、資料が読めない、相手の話を理解することができないというもどかしさが動機となり、学習に来ている例もある。日常生活レベルの語彙、動詞や形容詞を使った簡単な文は理解、使用できている人でも、活用や接続を間違えていたり、例えば、「～てしまう」「～ようだ」などのムードのレベルになると正しい意味、使い方を理解していなかったりすることが原因の1つだと思われる。このような学習者には、このコースで学習して初めてわかるようになったという感想を持つ者が多い。簡単な日常会話能力だけでは、日本の生活において保育園や学校の教師とのコミュニケーションをとったり、公的機関で事務処理をしたりするには不十分であり、少なくとも初級の語彙や文型を習得しておく必要があるだろう。成人が日常的に耳にする会話から習得できるのは単文や簡単な複文等であり、普通はそれ以上を自然に会得するのは困難なため、日常的なレベルだけでなく、より深く掘り下げる学習の場が必要であると思われる。

以上のような観点から、入門の3コースは日本で生活していく上で必要な日本語の基礎となる学習のために、初級の語彙・文型とそれを使った会話練習を中心にした文型シラバスで授業を行っている。しかし、3つのコースを合わせても授業時間は125コマ（187.5時間）程度であるため、授業は新文型導入と簡単な会話練習中心になりがちであり、授業時間だけで十分な運用練習をすることは困難である。従って、語彙の学習は自習に頼らざるを得ないのが実情である。しかし、中長期にわたり日本語を習得していく上で語彙の学習は文型の学習と共に重要なものであると思われる。例えば、あるテーマで文章や手紙を書いたり、まとまった内容を発表したりする時には、文型だけ知っていても、話すべき内容（情報）とそれを表す語彙が十分で

なければ、学習者はその課題を達成するのに大きな困難を感じるだろう。したがって、入門の3コースを終了した時点で、ある程度自律的に漢字や語彙、文型を学習していける能力を学習者に身につけてもらうことが当コースの目標の1つでもある。また、この自律的学習能力を身につけることは学習者が持つ苦手意識を克服するためにも有効であろう。以下に、主に漢字・語彙学習をめぐる問題点をまとめた。

- 1) 漢字圏である中国人の学習者の場合は、授業は直接法で行っているにもかかわらず、文字を見て理解し、音声は次の段階になるようである。どうしても、「聞く」、「話す」といった活動に苦手意識を抱く学習者が出てくる。どちらかということ、文字で理解するのに偏り、「聞く」、「話す」という練習、語彙や文を音声として記憶する時間が不十分になってしまう傾向がある。日常的に日本人と接している学習者はまだクラスでの練習不足を補うことができるが、接する機会の少ない学習者は運用できるようになるまでに時間がかかってしまう。
- 2) 非漢字圏の学習者は、一般的に音声と共に理解する傾向があるため、「聞く」、「話す」は漢字圏の学習者に比べると上達が速いという特徴がある。反面、音声で認識しているので、聞いたことは理解できるが、表記するときの誤りが多くなる。また、漢字学習まで手が回らないため、「読む」、「書く」ことはできないに等しく、生活する上で非常に不便であるのは明白である。学習していく上でも、漢字を知らないことによって不利益が生じているように思える。簡単な例を挙げれば、「おしえる」と「きょうしつ」では音声だけでは全く別のことばとしてしか認識できないだろうが、「教」という漢字と一緒に学習することができれば、2つのことばは容易に結びつく。さらに自分で学習を進めていく際に、生活の中で「教師」「教育」ということばにぶつかったとき、意味を類推することが可能になり、クラス外でも自律的に語彙を増やしていくことが容易になるであろう。
- 3) 漢字圏、非漢字圏にかかわらず指摘できる問題点として漢字語彙の不足が挙げられる。実際、日本での生活が長く、且つ日本語を日常的に使用している学習者であっても、「教師」ということばを知らずに「先生」ということばしか使えないというケースのように、限られた語彙だけで生活している学習者は多い。学齢期の子供がいて、いろいろな文書を目にしていなくてもそうである。このように使用できる語彙が限られていると、文型を学ぶ際にも学習が難しくなる。「～によると～そうです」などという文型を学習する段階になると、ニュースで聞いた話などを伝えたいくなるが、そんなとき語彙が限られていると、伝えることのできる内容は限られ、その結果、文型の運用練習が十分にできなくなる。
- 4) また、生活の中で必要な漢字を覚えた学習者は、その場その場で覚えているので、「高速道路」は何を意味するか知っていても、「通路」の意味がわからないことがある。「路」の意

味を理解していないからである。さらに「路上」「路面」の意味は類推できない。また、「路」の字の書き方を覚えるのに、足偏を知っていれば覚えやすいのは言うまでもないが、知らないと、印刷体をそのまま書き写したようなおかしい形の字になってしまうことも多い。

4. おわりに

以上、主に漢字・語彙学習についての問題点を4点指摘したが、ここではこれらの問題点をふまえてコース運営における留意点をまとめる。学習者が4技能に関して持っている苦手意識を克服するためには、①コースの中で自律的に学習する能力、特に漢字を含む語彙を増やす能力を身につけてもらう必要があること、また、コースの中でその意識を喚起すること、②そのためには初級文型中心のコースであっても、基礎的な漢字の体系的学習を組み入れたカリキュラムにすることの2点が挙げられる。つまり、漢字の基礎を体系的に学習しないと、漢字の習得、さらに会話、聞き取りにおいても必要な語彙の習得に困難が生じる可能性があるのだ。⁴ 基礎的なものだけでも学習しておけば、その後の学習の方法がわかり、コース終了後も自律的学習の助けになるものと思われる。また、漢字の学習は漢字圏の学習者にとっても有益であろう。中国語とは違う漢字の読み方を学習する場になるのはもちろん、読み練習を通して音声化して覚える練習となり、漢字圏学習者が持っている「聞く」、「話す」といった活動に対する苦手意識を克服する助けとなるからである。

今後はニーズ分析に基づくこれらの留意点を考慮したカリキュラムデザインを更に深く検討し、より地域在住の学習者のニーズに密着したコースにしていく必要があるだろう。そのためには常に個々の学習者の表情や態度を見守り、彼らの声を聞くという姿勢を維持続ける事が、現場の教員ならびに地域の日本語教育支援に関わる人達に求められているのではないだろうか。

最後に、本論は長年にわたり、日本語入門講座の教育に関わってきた講師陣のたゆまぬ創意工夫、努力から蓄積されたアイデアをもとに立ち上げた教材開発プロジェクトの一環としてまとめたものである。中でも漢字語彙学習に関する膨大なノートを寄贈していただき、仕事師としての本領を発揮し続けた岡野美恵氏、常に「個々の学習者の表情を見守り、彼らの声を聞く」姿勢を貫かれた森田弘氏に多大なる感謝の意を表したい。

【注】

1. 日本語入門講座受講生の主な地域・国別推移（延べ人数）とその他の国籍は以下のとおりである。

日本語入門講座受講生の主な地域・国別推移（※延べ人数）

| 年度 | 国籍 | 米国 | イギリス | カナダ | 韓国 | 中国 | フィリピン | オーストラリア | その他 | 年度計 | 累計 |
|------|----|----|------|-----|----|-----|-------|---------|-----|-----|-----|
| 4年度 | | 18 | 3 | 9 | 6 | 5 | 3 | 2 | 10 | 56 | 56 |
| 5年度 | | 3 | 7 | 9 | 12 | 6 | 2 | 3 | 6 | 48 | 104 |
| 6年度 | | 8 | 6 | 7 | 4 | 7 | 9 | 1 | 7 | 49 | 153 |
| 7年度 | | 16 | 7 | 5 | 0 | 5 | 2 | 1 | 10 | 46 | 199 |
| 8年度 | | 7 | 13 | 0 | 6 | 13 | 3 | 0 | 13 | 55 | 254 |
| 9年度 | | 6 | 6 | 0 | 0 | 9 | 5 | 0 | 14 | 40 | 294 |
| 10年度 | | 8 | 6 | 3 | 3 | 12 | 1 | 0 | 23 | 56 | 350 |
| 11年度 | | 2 | 7 | 1 | 4 | 9 | 3 | 0 | 9 | 35 | 385 |
| 12年度 | | 5 | 2 | 2 | 5 | 12 | 8 | 4 | 9 | 47 | 432 |
| 13年度 | | 4 | 4 | 0 | 7 | 16 | 5 | 2 | 14 | 52 | 484 |
| 14年度 | | 3 | 7 | 4 | 8 | 12 | 4 | 2 | 24 | 64 | 548 |
| 15年度 | | 1 | 5 | 2 | 10 | 17 | 2 | 8 | 27 | 72 | 620 |
| 16年度 | | 4 | 4 | 1 | 6 | 8 | 14 | 4 | 22 | 63 | 683 |
| 17年度 | | 4 | 3 | 5 | 10 | 15 | 8 | 4 | 20 | 69 | 752 |
| 18年度 | | 3 | 3 | 2 | 5 | 15 | 6 | 4 | 24 | 62 | 814 |
| 国籍別 | | 92 | 83 | 50 | 86 | 161 | 75 | 35 | 232 | | |

※ その他受講者の国籍

アイルランド・アルゼンチン・イスラエル・イタリア・インドネシア・ウクライナ・エルサルヴァドル・オランダ・カンボジア・クロアチア共和国・コロンビア・ザンビア・シェラレオネ・シンガポール・スペイン・スリランカ・タイ・台湾・タンザニア・チリ・ドイツ・トルコ・日本・ニュージーランド・ネパール・フィンランド・ブラジル・フランス・ブルガリア・ベトナム・ポーランド・香港・マレーシア・南アフリカ・メキシコ・モロッコ・モンゴル・ルーマニア・ロシア・ナイジェリア

2. コメントについては2003年度1学期と2004年度1学期の「会話・読み書きコース」の受講者20名を対象に行った聞き取り調査の結果から抜粋したものである。この調査は注3の目的で行ったもので、アンケート調査と聞き取り調査からなり、アンケート調査では「4技能の重要度」と「学習目的の重要度」についての結果はほぼ今回の結果と一致している。
3. この「読み書き」能力に関するニーズ調査（アンケート調査、聞き取り調査）は2003年度と2004年度の1学期に「会話・読み書きコース」の受講者計20名を対象に行った。当時は「会話コース」と「会話・読み書きコース」の2コースしかなかったため、将来のコース編成を検討するために調査したものである。
4. 清水（1991：30）は「限られた漢字の使用からみた、習得語彙数が少ない学習者、習得語

彙の運用力があまりない学習者にとっての問題点」として次の点をあげている。

既習漢字ではあるが、字義の広がりを理解していないと、新出語彙の字義は語意が分かりにくいこと。

例1) 安定、不安(「安い」という意味ではなく、「安らかな」という意味)

例2) 売上高(「～高」が「高い」という意味ではなく、「金額」という意味)

新聞や雑誌で経済に関する記事を読んでいると「高い」「安い」という視点でのみ「安」という字の語彙を見てしまいがちである。もちろん、初級で「安心する」という語彙は導入され、学習者の頭には「安らかな」という意味も入ってはいると思われるので、状態、状況を表す字義を練習に取り入れると同時に「字義はいつも1つではない」ことを確認する必要があると思われる。

【参考文献】

- 川口義一 1993 「コミュニケーション・アプローチの漢字指導」『日本語教育』第80号 日本語教育学会
- 大北葉子 1995 「漢字学習ストラテジーと学生の漢字学習に対する信念」『世界の日本語教育』5 国際交流基金 日本語国際センター
- 藤井涼子 1997 「漢字教育」『日本語教育』第94号 日本語教育学会
- 清水百合、永守彰子、花田敦子、岡野美恵、松崎定子、岩元由起子 1997 「漢字語彙の運用力をつける指導について」『九州大学留学センター紀要』第9号 九州大学留学生センター
- 清水百合 1999 「初級学習漢字の中級レベル語彙における運用について(1) -い形容詞の場合-」『九州大学留学センター紀要』第10号 九州大学留学生センター
- 鈴木智美 2003 「多義語の意味のネットワーク構造における心理的なプロトタイプ度の高さの位置付け-多義語「ツク」(付・着・就・即・憑・点)のネットワーク構造を通して-」『日本語教育』第116号 日本語教育学会

平成18年度 国際教育交流センター 活動記録

| 月 | 活 動 内 容 |
|----|--|
| 4 | 客員教員（文学部）受入 カーディフ生企業研修開始 交換留学生受入（クイーンズランド大学、タスマニア大学、大連外国語学院） 交換留学生オリエンテーション 北方キャンパス学部留学生オリエンテーション 大連外国語学院交換教員受入 春学期日本語入門講座開講 留学生新入生歓迎会（北方キャンパス学部留学生及び交換留学生） |
| 5 | 春期留学支援語学講座開講 |
| 6 | カーディフ生企業研修報告会 外国人留学生後援会役員会・総会 |
| 7 | 春学期日本語入門講座修了式 春期留学支援語学講座修了式 交換・短期留学生送別会（オックスフォード・ブルックス大学、カーディフ大学、仁川大学校） |
| 8 | オールド・ドミニオン大学交換教員受入 夏期語学研修学生派遣（タスマニア大学、大連外国語学院） 交換留学生派遣（ピッツバーグ大学） |
| 9 | オールド・ドミニオン大学交換教員派遣 交換留学生派遣（オックスフォード・ブルックス大学、カーディフ大学） 交換留学生受入（オックスフォード・ブルックス大学、カーディフ大学） 短期留学生受入（仁川大学校） 交換・短期留学生オリエンテーション |
| 10 | 交換・短期留学生歓迎会（オックスフォード・ブルックス大学、カーディフ大学、仁川大学校） 2006年度日本語懸賞論文コンクール（共催：小倉南ロータリークラブ） 秋学期日本語入門講座開講 秋期留学支援語学講座開講 |
| 11 | 日本文化研修バスハイク（秋芳洞・秋吉台・角島） |

| | |
|---|--|
| 1 | <p>秋期留学支援語学講座修了式 秋学期日本語入門講座修了式 北九州市立大学外国人留学生後援会会報誌『かけはし』No.5 発行 2006年度日本語懸賞論文コンクール入賞作品発表会及び意見交換会 『2006年度日本語懸賞論文コンクール作品集』発行 交換留学生送別会（クイーンズランド大学、タスマニア大学、大連外国語学院）</p> |
| 2 | <p>交換留学生派遣（クイーンズランド大学） 春期語学研修学生派遣（タコマ・コミュニティカレッジ、ダグラス・カレッジ）</p> |
| 3 | <p>交換留学生派遣（タスマニア大学、大連外国語学院） 『北九州市立大学国際論集』第5号発行</p> |

執 筆 者

(掲載順)

| | |
|-----------------------|---------------------------|
| 板 谷 俊 生 | 外国語学部教授 国際教育交流センター兼任所員 |
| 水 本 光 美 | 国際環境工学部教授 国際教育交流センター兼任所員 |
| 福 盛 寿 賀 子 | 国際環境工学部・国際教育交流センター非常勤講師 |
| 印 道 緑 | 国際教育交流センター教授 |
| Christopher W. Storey | 国際環境工学部語学教師 |
| Rodger S. Williamson | 国際環境工学部助教授 国際教育交流センター兼任所員 |
| Anne M. Crescini | 国際環境工学部語学教師 |
| 小 林 浩 明 | 国際教育交流センター助教授 |
| 田 吹 ともみ | 国際教育交流センター非常勤講師 |
| 應 地 弥 生 | 国際教育交流センター非常勤講師 |

編 集 委 員

(50音順)

| | |
|---------|---------------------------|
| 河 野 智 謙 | 国際環境工学部助教授 国際教育交流センター兼任所員 |
| 小 林 浩 明 | 国際教育交流センター助教授 |